

日本におけるルカーチの翻訳・受容史概観

西角 純志

本稿は、20世紀のマルクス主義の古典的著作『歴史と階級意識』（1923）を著したことで知られているゲオルク・ルカーチ（Georg Lukács, 1885-1971）の翻訳受容史を検討することを目的とする。ルカーチの受容は、もっぱら『歴史と階級意識』のなかの「物象化論」に集中しているが、翻訳受容史という視点からのアプローチは少ない。そこで、今回、改めて、ルカーチの翻訳受容史を検討することにより、日本におけるルカーチの〈歴史的痕跡〉を顧みることにはしたい。

わが国のルカーチ受容は、福本和夫が、1925年の段階で、雑誌『マルクス主義』によせた論考において、『歴史と階級意識』の参照を求めたことに遡る。そして、1927年に『歴史と階級意識』のうち「階級意識論」と「組織論」の一部が翻訳紹介された¹⁾。その背景にあったのは、「山川イズム」と「福本イズム」をめぐる論争であった。池田浩士は、次のように述べている。日本は、『歴史と階級意識』を中心とする初期のルカーチの理論が、政治的実践の指導原理とのかかわりで一定の役割をはたした唯一の国でもあった。20年代の日本におけるルカーチは、たんなる理論上の問題ではなく、日本プロレタリアートの戦略・戦術と直接かかわるきわめて実践的な契機だった²⁾。しかしながら、コミンテルン型社会主義が「マルクス＝レーニン主義」（スターリン主義）として確立していくなかで、福本イズムもまた、「すでにコミンテルン内部で激しい批判を受けていたルカーチ（およびコルシュ）一派のいわば主流として³⁾」退けられたのである。それ以後、戦前期の共産党に対する弾圧もあって、ルカーチの著作におけるアクチュアルな政治理論としての側面は見失われ、戦後の一時期までもっぱら「マルクス主義文芸評論家、美学者」としてのルカーチが論じられることになった。

ルカーチの芸術論が日本に紹介されたのは30年代の社会主義リアリズムが確立された頃である。最も早く紹介されたのが、『マルクス・エンゲルスの芸術論』（上田進訳、岩波文庫、1934）に収められた『ジッキンゲン』をめぐるマルクス＝エンゲルスとラッサールとの論争の論評である⁴⁾。この論考は、ルカーチが起草した「ブルム・テーゼ」（1928）に対するコミンテルンの批判を契機に、前衛的な党活動家としての自己を断念し、理論的活動に専念することを決意したルカーチが、30年代にモスクワのマルクス＝エンゲルス研究所の所員として、ミハイル・リフシツ、シルレルらと共に、マルクス主義文芸理論の構築を目指した最初の成果の一つであった。30年代のルカーチは、まず、「知られざる」マルクス、エンゲルスの芸術論の遺稿の注釈者として登場したのである。

日本におけるルカーチの文芸理論の受容史を論じる上で欠かせないのが深江浩が『季報唯物論研究』第60号、第86号に発表した「日本の文学批評にとってのルカーチ」という論考である⁵⁾。深江は、ルカーチ文芸理論の受容の源泉を荒正人「回想・昭和文学40年」(『荒正人著作集』第2巻、三一書房、1984)から丹念に解きほぐしている。この時期『文学批評家』(Literaturnyj Kritik)誌(1937-38)にロシア語で連載されたルカーチの「歴史小説論」が、山村房次の翻訳によって『歴史文学論』(三笠書房、1938)として紹介されており、岩上順一は、これに触発されて『歴史文学論』(中央公論社、1942)を著し、森鷗外、芥川龍之介、島崎藤村の歴史小説を論じた。また、『世界文化』(1935)に発表された熊沢復六による『小説の理論』の翻訳や、新カント派雑誌『ロゴス』(Logos)の第7巻(1917-8)に掲載された「美学における主観客観関係」も日本に入ってきており、大西克礼が『現象学派の美学』(岩波書店、1937)において取り上げている。佐々木基一は、東大在学中の1935年から38年にかけて、大西克礼の講義を聴き、ルカーチの美学芸術論の理解を深めていったのだ。そして、佐々木を介して、ルカーチは、小田切秀雄や、荒正人らにも影響を与えることになった。小田切秀雄は、『現代文学』によせた「近代日本文学の古典期」(1941)において、崩壊した調和的人間像を回復しようとする文学者の典型として志賀直哉と浪漫的な高村光太郎を論じている。「調和的人間の崩壊と回復」というテーマは、佐々木が『言葉』(Das Wort)誌から翻訳したルカーチの「ブルジョワ美学に於ける調和的人間の理想」であり、『小説の理論』に由来するものであった。また、杉山英樹は、リアリズムの典型としてのバルザックに本格的に取り組み、社会的現実と作家の態度、想像力の機能などを精密に明らかにした。それが、編訳『バルザック＝スタンダール芸術論争』(昭森社、1943)、『バルザックの世界』(中央公論社、1942)といった形で結実した。その他、ルカーチから影響を受けた重要な評論として、本多秋五『戦争と平和論』(鎌倉文庫、1947)、丸山静『島木赤彦』(八雲書林、1943)があげられている。日本にルカーチが受け容れられた時期は、プロレタリア運動が解体した時期と重なっており、言論・思想への弾圧は益々激しさを増していったという。そうした状況のなかでルカーチの理論は文芸批評家たちの心の支えとなり、同時に、それまでのプロレタリア文学理論にしばしば見られた「素朴な社会的土台還元主義」や「世界観と創作方法」の混合を批判的に検討し、これを克服してゆく展望を与える役割を果たしたのだ。

第二次世界大戦後、ルカーチは、母国ハンガリーに帰国し、モスクワ時代の著作をハンガリー語、ドイツ語で公刊しはじめる。45年から47年にかけて執筆された『ドイツ文学小史』(岩波現代叢書、1951)が、道家忠道、小場瀬卓三によって翻訳され、また、同時期の著作『ゲーテとその時代』(笹本駿二訳、中央公論社、1952)が紹介された⁶⁾。これを契機として、ルカーチは、日本のドイツ文学者や哲学者のあいだでも広く知られることになったのである。また、

フランス語で公刊された『実存主義かマルクス主義か』も、ルカーチが国際的にも幅広く知られる契機となった⁷⁾。ルカーチが実存主義批判に取り組む直接のきっかけは、46年のジュネーヴ国際会議にある。ルカーチは、カール・ヤスパースと論戦を交わし、また三年後には、パリに赴いてサルトルとも論争を展開した。その成果が『実存主義かマルクス主義か』(城塚登・生松敬三訳、岩波現代叢書、1953)である。ルカーチの実存主義批判の背景には、実存主義がハンガリーの知識人に及ぼしたペシミスティックな影響があったからだと考えられる。旧ソ連の影響下のハンガリー社会主義体制においては、実存主義を認めることができないのである。ルカーチは、当時、流行しつつあったフランスの実存主義者、サルトル、ボーヴォワール、メルロ＝ポンティらに対する批判を試みた。後に、サルトルは、『弁証法的理性批判』(1960)において、実存主義は、イデオロギーであってマルクス主義の哲学を補完する役割を果たすに過ぎないことを言明した⁸⁾。その後、現代思想は、実存主義から構造主義へとパラダイム転換を遂げるなかで、マルクス主義もまた、厳しい批判に晒されることになった。藤野渉編『現代思想としてのマルクス主義—ルカーチとの対決』(大月書店、1959)は、ルカーチに対する批判が収録されている。ルカーチが、岩波講座『現代思想』別巻(1957)に寄稿した「思想的自伝」(清水幾太郎訳)もこの時期に公刊されている。この論考は、1933年に書かれた「マルクスへの私の道」の続編とした書き足されたものである。

ルカーチの受容の本格的な見直しは、1960年代以降に活性化する。『歴史と階級意識』の全訳を含む著作集(全13巻・別冊1巻、白水社、1968-9)をはじめとして『ルカーチ初期著作集』(全4巻、三一書房、1975-6)および『論争・歴史と階級意識』(河出書房新社、1977)といった初期ルカーチの著作が翻訳出版された。この時期までにルカーチの主要著作の翻訳は、ほぼ出揃うことになる。平井俊彦による抄訳『歴史と階級意識』(未来社、1962)は、今日においても利用されることが多い。こうしたルカーチの受容の進展の背景には、1956年のスターリン批判、さらには中ソ論争といったハンガリー1956年革命に始まる社会主義諸国の激しい動揺と、それに続く既成左翼を理論的・実践的に乗り越えようとする運動の高揚があった。『歴史と階級意識』をはじめとする初期の著作は、「マルクス＝レーニン主義」(スターリン主義)の教条的体系が理念的権威を失っていくなかで、それに対する批判的視角を見出すことができたのである。1960年から70年代における研究も、単なる古典の紹介にとどまらず、1920年代における受容と同じく、あくまでアクチュアルな理論としてルカーチを批判的に検討するという問題意識のもとに行われた。池田浩士による『初期ルカーチ研究』(合同出版、1972)、『ルカーチとこの時代』(平凡社、1975)。そして、浦野春樹他『ルカーチ研究』(啓隆閣、1972)、村上嘉隆『全体性と個人的個人』(啓隆閣、1972)、同じく、『美学における唯物論』(啓隆閣、1972)もこの時期に刊行されている。丸山珪一による精密かつ詳細な「ルカーチ年表」(1977-8)

や、「ルカーチ邦訳リスト」(1983)も次々に発表されている。また、旧ソ連・東欧型社会主義体制下のポーランドに長年の歳月をかけて留学し、『歴史と階級意識』の包括的な研究をした石塚省二の『社会哲学の原像』(世界書院、1987)もこれに加えることができる。

1989年に始まる社会主義諸国の崩壊とともに「マルクス＝レーニン主義」もまたその権威を失墜していった。そして、これを境にして『ルカーチとハンガリー』(未来社、1989)と題する研究文献や著作の邦訳が公刊され、ルカーチへの関心が再び高まった。早くからルカーチの紹介を試みた平井俊彦が『物象化とコミュニケーション』(名古屋外国語大学、1993)を刊行し、また、高幣秀知『ルカーチ弁証法の探究』(未来社、1998)、初見基『ルカーチ』(講談社、1998)といった著作も出版されている。とりわけ、高幣による「追隨主義と弁証法」の一部抄訳は、コミンテルンからのルカーチ批判への応答となっている。『社会思想史研究』(1986)においては、ルカーチ生誕百年を記念してシンポジウムが企画され「ルカーチと現代」の特集が組まれている。雑誌『季報唯物論研究』においても、1997年、2003年に亘って特集が組まれている。そして、2008年、世界で最初の「ルカーチ・ビブリオグラフィ(国際スタンダード版および日本語版)」の「試行版」が丸山珪一によって刊行された⁹⁾。丸山珪一の仕事は、冷戦時代には、ほとんど不可能だと考えられていたロシアやハンガリー、そして、ドイツ、フランス、イタリアなど世界各国にわたってルカーチの「初出」の論考を確認・調査したものである。近い将来、ドイツの出版社で正式に刊行され、インターネットでも利用可能になるはずである。

ルカーチ研究は、文学、歴史哲学、美学・芸術社会学と多岐の領域に跨っており、研究者によって扱う時代や対象作品が異なる。ルカーチの研究を分類するとすれば、『歴史と階級意識』を中心とした社会・政治運動の理論とマルクス主義的美学・芸術理論に大別することができる。各々の理論は、個別・抽象的な理論でもなく、まして、独立して存在するものではない。20世紀のヨーロッパ社会思想史に正しく位置づけられなければならないと考える。東西冷戦構造が崩壊し、硬直した教条体系が取り払われた今だからこそ、ルカーチの思想を20世紀社会主義の歴史のなかに位置づけ、客観的に捉え直すことができるようになったといえるのではなかろうか。

註

(1) ※『歴史と階級意識』(1923)の年代順・翻訳受容史

- ・水谷長三郎・米村正一訳『階級意識とは何ぞや — 「歴史と階級意識」階級意識論』同人社、1927年。
- ・小林良正訳『組織の方法論』白揚社、1927年。

- ・平井俊彦訳『階級意識論』未来社、1955年。
- ・相沢久訳『組織論』未来社、1958年。
- ・平井俊彦訳『歴史と階級意識』未来社、1962年。
- ・平井俊彦訳『ローザとマルクス主義—歴史と階級意識』ミネルヴァ書房、1965年。
- ・城塚登・古田光訳『ルカーチ著作集9』白水社、1968年、[再版]1986年。
- ・城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社、1975年。
- ・城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社イデー選書、1991年。

その他、関連する「序文」、「思想的自伝」等。

- ・清水幾太郎訳「思想的自伝」『現代思想』別巻（歴史・人間・思想）岩波書店、1957年、249-266頁。
- ・石渡均訳「ある批判的回想：『歴史と階級意識』への新しい序文」『世界文学』第39号、20-23頁、及び第40号、18-46頁、世界文学会、1971年。
- ・伊藤成彦訳「思想的自伝」『文学的立場』第6号、1972年、133-157頁。
- ・池田浩士編訳「その批判は安んじて歴史にゆだねよう—『歴史と階級意識』新版への序文」『論争・歴史と階級意識』河出書房新社、1977年、402-428頁。
- ・高幣秀知一部抄訳「追隨主義と弁証法」『ルカーチ弁証法の探求』未来社、1998年、58-80頁。

※『レーニン論』（1924）の年代順翻訳・受容史

- ・大井元訳『レーニン』白揚社、1927年。
- ・渡辺寛訳『レーニン論』青木書店、1964年。
- ・渡辺寛訳『レーニン論』こぶし書房、2007年。

※『小説の理論』（1920）の年代順・翻訳受容史

- ・熊沢復六訳「小説の理論の問題(1)」『世界文化』8月号、1934年、33-42頁。
- ・熊沢復六訳「討論のための報告演説、結語」、コム・アカデミー文学部編『小説の本質（ロマンの理論）』清和書店、1936年、7-28頁及び177-84頁。
- ・熊沢復六訳「ブルジョア叙事詩としての長編小説」『短編・長編小説』清和書店、97-189頁。
- ・原田義人訳『小説の理論』未来社、1954年。
- ・原田義人・佐々木基一訳「小説の理論」『世界教養思想全集9』（近代の文芸思想）、

河出書房新社、1963年、267-374頁。

・大久保健治・藤本淳雄・高本研一訳『ルカーチ著作集2「小説の理論」』白水社、1968年、[再版]1986年。

・原田義人・佐々木基一訳『小説の理論』ちくま学芸文庫、1994年。

- (2) 池田浩士編訳『論争・歴史と階級意識』河出書房新社、1977年、14頁。
- (3) 池田浩士編訳 前掲、36頁。
- (4) Vgl. G.Lukács, “Die Sickingendebatte zwischen Marx-Engels und Lassalle”, in *Internationale Literatur*, Nr.2. (Mär./Apr.), Marx-Sondernummer, 1933, S.185-87.
- (5) その他以下の文献を参照。
「対談：ルカーチ理論と今日的意義—佐々木基一＋池田浩士」『新日本文学』、294号、1972年、125 - 141頁。
佐々木基一『リアリズムの探求』未来社、1965年。
針生一郎『リアリズムの異説—針生一郎評論2』田畑書店、1966年。
- (6) G. Lukács, *Skizze einer Geschichte der neueren deutschen Literatur*, Aufbau-Verlag, Berlin, 1955.
- (7) G. Lukács, *Existentialisme ou marxisme?* traduit du Hongrois par E. Kelemen, Éditions Nagel, Paris, 1948.
- (8) Jean.P.Sartre, “Marxisme et Existentialisme”, in *Critique de la raison dialectique* : Tome 1. précédé de Question de méthode Gallimard, Paris, 1960, pp.15-32. (平井啓之編訳『サルトル全集25』、人文書院、1962年、13-47頁)
- (9) K. Marukama, *Lukács-Bibliographie* : Probe-Fassung, 2008.

[2006-07 科研費課題番号：18520065]

国際ルカーチ学会のウェブサイト (<http://www.lukacs-gesellschaft.de/>)

(追記)

尚、筆者の最近の研究としては「カール・シュミットとルカーチ—構成的権力としての独裁論をめぐって」『理想』第684号、2010年を参照して頂ければ幸いです。